

〈論 文〉

あいさつ言葉の変化 Transformation of Aisatsu Words

くらもち ますこ
倉持 益子

(早稲田大学日本語教育研究センター)

キーワード あいさつことば 言語変化 定型化 ファティック化 場の共有意識

要旨

本稿は、あいさつ言葉を通して二つのことを明らかにすることを目的としている。一つ目は、人間関係の良好化を目的とした言葉が、どのように選択され、使用されていったのかを明らかにすることである。すなわち、あいさつ言葉がコミュニケーションの入門的地位に置かれていながら、時として非常にデリケートな選択に迫られる実態と理由を明らかにすることである。

もう一つは、定型化された言葉が、変容していく様態と原因を明らかにすることである。この変容を本論文では「形式 (form)」と「内容 (contents)」に分けて見ている。たとえば、「おはようございます」が「おす」に変化するの形式上の変容であるが、江戸期気の置けない仲間同士のあいさつだった「こんにちは」が、知識人をはじめ広く使われるようになると内容の変化になる。これら使用法の実態と変化の様相を見ることにより、日本語のあいさつ言葉の特徴や言語と社会との関係が明らかになる。これこそが最大の目的といえる。

多くのあいさつ言葉は、かつて実質的な意味を持っていた文の一部が決まり文句として繰り返し使われるうちに、他の部分が省略され、その部分だけで役割を果すようになることで生まれた。例えば、「さようならば (これにて失礼いたします等)」が、別れを表す「さようなら」になったことが当てはまる。その「さようなら」はさらに「さよなら」「さいなら」に変化する。このような社交 (交感) 機能を持った言葉は、実質的な意味から解放されたため、社交的機能が果たせるかぎり形を変え続け、それに伴い機能 (特にポライトネス) も変化していく。

本稿は、定型化社交言語の生成を「ファティック化」、その後の変化を「ファティック化が進む」とし、両現象を広い意味での「ファティック化 (phaticalization)」という言葉で表している。これらの用語は、本論文執筆者と指導教授からの示唆による新しい概念である。

abstract

This purpose of this paper is intended to prove the two facts through Aisatsu words. First, among the words which aims as good relationship, how it is selected and how it is being used will be discussed.

It is clarified that though Aisatsu words acts an introduction in communication, sometimes it will force you for a delicate choice in the actual situation and reason.

Another fact that the behavior and cause in the transformation of stylized words are clarified. This transformation is divided into "contents" and "form" in this paper to be discussed. For example, the change of "Ohayogozaimasu" to "Osu" is a transformation of form. "Konnichiwa" which was used as a greeting among affable fellows in Edo period but it had been widely used among the knowledgeable people later which shows a change in contents. By looking at the reality of usage and situation of change, the relationship between characteristics of Japanese Aisatsu words and language and society can be clarified which is the main purpose of this paper.

Most Aisatsu words was used repeatedly as a determined phrase of part of sentence with substantial meaning. By omitting other parts, it also works for that part only. For example, "Sayonaraba" had become "Sayonara" which has a meaning of parting. "Sayonara" is then transformed to "Sayonara" and "Sainara". For this wording with social (phatic) functions, as the substantial meaning was released, the form was transformed to fulfill the social functions while the according functions (especially politeness) is also transformed.

In this paper, the generation of standardized social language is under phaticalization. After that, the change is treated as "processing of phaticalization". This two phenomenon was expressed as phaticalization in wide meaning. These terms is a new concept suggested by the author of this paper and professor.

1. はじめに

人にあいさつするという行為が人間関係に大きな役割をしていることは、学校教育におけるあいさつ指導や、そこかしこで見かけるあいさつ奨励のポスターを見れば明らかである。しかし、この身近で重要なあいさつ言葉が、時には不快感を与えてしまう。その原因は、拙稿倉持(2013)で触れたが、年齢、属する集団、階層等であいさつ言葉の使い方が異なっているからである。そこには、送信者と受信者双方が気付きにくい「言語変化」が存在する。

本稿の目的は、定型化されたあいさつ言葉が変容していく様態とその原因を明らかにすることである。この変容を本稿では「形式(form)」と「内容(contents)」に分けて見ている。たとえば、「おはようございます」が「おす」に変化するの形式上の変容であるが、江戸期気の置けない

仲間同士のあいさつだった「こんにちは」が、知識人をはじめ広く使われるようになると内容の変化になる。これら使用法の実態と変化の様相を見ることにより、日本語のあいさつ言葉の特徴や言語と社会との関係が明らかになる。これこそが最大の目的といえる

2. あいさつ言葉とは何か

あいさつ言葉は、日本語文法の品詞では感動詞に分類される。感動詞とは、自ら発する感動（感嘆）の言葉と他者への呼びかけからなる自立語である。したがって、あいさつ言葉は、他者への呼びかけを目的とした自立語と定義づけられるであろう。しかし、この定義付けには「機能」という概念が抜けている。言葉であり、他者を意識して投げかけられたものであるならば、何らかの機能が備わっていなければならないはずである。

あいさつ言葉とは何かを考えるには、機能を中心とした定義付けがさらに必要になる。井出（2003）では、あいさつを「対人関係の維持や変化を示し確認するもの」としている。このように対人関係の維持や変化を示し確認する言語活動を、マリノフスキー（1923）は「交感的言語使用」、すなわち「ファティックコミュニオン（phatic communion）」と名付けた。

あいさつ言葉は交感的言語であると定義づけることができる。したがって、情報のやり取りを第一の目的とするものではない。交感的言語行動であるならば、使用形式はさまざまな可能性が考えられる。例えば、出会いの場面でなら、「鈴木！」「先生」等と相手の名前や職位を呼ぶ行為、「よう」「やあ」等の呼びかけ、「めし食った？」「今から？」等の質問、「おつかれ」「ごくろうさん」等の労い等多種多様にわたる。その中でも、「おはよう」「こんにちは」のように、特に多く使われる決まった表現がある。すなわち、「定型化交感言語」である。

3. 定型化交感言語の変化（ファティック化）

3.1. あいさつ言葉の形式の変化

多くのあいさつ言葉は、かつて実質的な意味を持っていた文の一部が決まり文句として繰り返し使われるうちに、他の部分が省略され、その部分だけで役割を果すようになることで生まれた。例えば、「さようならば（これにて失礼いたします等）」が、別れを表す「さようなら」になったのが挙げられる。その「さようなら」はさらに「さよなら」「さいなら」に変化する。

沢木・杉戸(1999)は、その形式の変化について以下のように述べている。

あいさつ言葉はいったん定型化すると、その語形・音形はどんどん「摩滅する」傾向が見られる。（中略）その場でコミュニケーションを実現するための対人的なふれあいを作り上げることに主眼のある **phatic** な言語行動があいさつであってみれば、そこでのあいさつ言葉は、きちんとした語形、本来的な語形をいちいち丁寧に言われなくても機

能を果たしうる。

(沢木・杉戸, 1999 : 131)

このような社交（交感）機能を持った言葉は、実質的な意味から解放されたため、社交的機能が果たせるかぎり形を変え続け、それに伴い機能（特にポライトネス）も変化していく。

以上のような言語の生成と変化の過程は、他の言語からも見つけることができる。英語の「バイバイ」がその例である。本稿は、定型化社交言語の生成を「ファティック化」、その後の変化を「ファティック化が進む」とし、両現象を広い意味での「ファティック化」という言葉で表す。

3.2. 文法化との違いとファティック化の定義

ファティック化に近い概念として「文法化」が挙げられる。大堀壽夫(2004)によると、文法化とは、それまで文法の一部ではなかった形が、歴史的変化の中で文法体系（形式論・統語論）に組み込まれるプロセスであるとする。

「自立性」を持った語が、付属語化することであるという「文法化」に対し、ファティック化は、ある状況下でよく使われていた句が自立性を持ち一語化し、交感言語の機能を担うようになることである。付属語化する文法化とは方向性が逆であろう。したがって、「文法化」とは分けて考えるべきである。

以下にファティック化の概念を定義付ける。

ファティック化とは、それまで交感機能に特化した独立語ではなかったものが、交感目的の語（ファティックコード）となるプロセスである。

あいさつ言葉等の定型化社交言語が生成される過程は、今まで特定の呼び名のない現象であった。その現象は、いわゆる「文法化」とは異なる。「ファティック化 (phaticalization)」という概念が成り立つことを提唱したい。

4. 定型化と日本語あいさつ言葉の変化

4.1. 「さあらば」の定型化

繰り返されていた表現が定型化し、一つの感動詞となっていくことも変化である。日本で最も早く定型化したのは、別れの言葉であると言われる。それは、平安時代に使われるようになった「さあらば」から成った「さらば」である可能性が高い。ここでは、平安時代以降、定型化しては次なる言葉との交代を繰り返してきた別れの言葉を例として言語変化を見てみたい。

前田 (1985)に以下の記載がある。

「別れの時のあいさつ言葉は比較的早く発達していたらしい。(中略)
中古前期にはすでに“さらばよ”という別れの言葉が成立していたことが分かるのである。」

(前田, 1985: 83)

では、その「さあらば」の「さ」とは、何かを指す言葉である。現在語では「そ」に当たるであろう。では、何を指しているのだろうか。それは、対面している相手との「時の変化」である。状況から、別れるのいい頃合いを感じ取り、それを「さ」で表している。しかし、これは、二人あつてのことであるから、一方的に宣言はできない。「あなたもそうであるならば」と仮定の形で提案している。よく阿吽の呼吸というのが、状況を変えるタイミングを計り、それを「どうですか」と相手に持ちかけるといのが、日本人の好む別れのパターンではないだろうか。

これ以降、このように空気を読み合い、お互いに呼吸があつたと見るや、一つの時間の終り(時には何かの始まり)を指す語は、別れの言葉の定番となった。「さようなら」「そんなら」「それでは」「じゃあ」「ほな」「したら」等、時代、使用地域が違えど、やはり、共有した時間と場所を意識し、阿吽の呼吸で区切りを付ける別れの方法は同じである。

「さ」も「そ」も使っていない別れの言葉としてよく使われるのは、「失礼します」と「お疲れさまでした」であろう。

まず、「失礼します」と言って退出するのはなぜなのか。これは、共に同じ場で過ごした安定した時間を破ることへの失礼である。また、仕事終了時の「お疲れさま」も、同じ場で時間を過ごし、相手が疲れているのを知っているから掛ける言葉である。どちらも、「さようなら」タイプと共通している点がある。

したがって、日本人の別れのあいさつは、場を共有していたことを認識し、雰囲気から時間の区切りを読み、お互いの了解の下に別れを宣言することであるといえる。

4.2. 別れの言葉が定型化する時

次に、別れの言葉がいかに「区切りの機能」から定型化してきたか見てみたい。江戸期の半分以上は東西ともに、「さらば」系の別れのあいさつを使っていた。「さらば」から派生語が次々に現れる。「あば」「あばあば」「あばよ」「さらばへ」等である。これらの変化は、「さらば」が時を区切る機能が希薄化され、単なるあいさつの記号と化してしまったことを表している。

日本人は、別れを告げるのに、相手との呼吸を計り、区切りを表す儀式を行わないと別れられない性分らしい。そのため、この「さらば」系がその機能をなくした時、さらなる区切りの言葉が必要とされた。これが、「さようなら(ば)」である。

「さらば」の系譜以外には、階層を超えて広く「ごきげんよう」が使われていた。この語に前出の「さようなら」が付いてくるようになる。以下の表は、発行時順に別れの言葉の使用例を並べたものである。

表 1 江戸期「さようなら」の主な使用例

	発行時期	著者名	作品名	使用例
1	1769	臼岡先生	郭中奇譚	「さよなら御きげんよう」
2	1770	北左農山人	南江駅話	袖「モウヨルマイ」茶「サヨウナラ 御機嫌ヨウ」
3	1775	馬糞中咲菖蒲(大田南畝)	甲駅新話	「左様なら、御きげんよう」
4	1779	山手馬鹿人	道中粹語録	左様なら御きげんよう。お静かにめしまし
5	1787	山東京伝	總籬(そうまがき)	「さやうなら、おいらん」「おやかましうござりいした」「どなたもごきげんよう」
6	1788	唐洲	曾我糠袋	さく「徳蔵御供にでやアさやうなら、御きげんよふ」時「いつてまゐりやせう」さよ「おさくさん。さようなら」
7	1795	南杣笑楚満人	敵討義女英	「さようならば道中ごきげんよく」
8	1802	十返舎一九	東海道中膝栗毛	「皆さんこれに、ハイ、さようなら」
9	1813	式亭三馬	浮世床	「ハイ、さやうなら」
10	1826	葦廼屋高振	色深狭睡夢	「平さん、さやうなら」

18 世紀に当たる 1～7 には、「さようなら」が「ごきげんよう」といっしょに使われている。しかし、19 世紀に入ったころ「さようなら」は「ごきげんよう」といっしょとはいえなくなる。

18 世紀から 19 世紀になる頃、すなわち寛政から享和の頃にはほぼ定型化した感動詞になったと見る。その理由は、さようならの前に「ハイ」等、時間を区切る表現が使われるようになるからである。「さようなら」は、その場の頃合いを読んで、時間の区切りを告げるための接続表現である。その言葉の前に、さらに区切りの言葉を付けるということは、後ろの「さようなら」に区切りの機能がなくなったことを意味する。

この「ハイ」という掛け声は、意味のある言葉ではないが、相手の注意を喚起することで、一種の区切りの機能を持つと考えられる。この語は、この頃より以前から、あいさつ言葉に付けて使われている。

例 1 『曾我糠袋』

「ハイ、御きげんよふ」

(唐洲, 1788)

これとほとんど同時期に出されたものにこのようなものがある。

例2 『總籬（そうまがき）』

「さようなら、御きげんよふ」

（山東京伝，1787）

すなわち、「ハイ」と「さようなら」は似たような機能を持っていたと見られる。しかし、それが「ハイさようなら」となったことで、「さようなら」は別れを告げる機能を持つ感動詞であり、定型化したあいさつ言葉とすることができる。

4.3. 別れの言葉「では」「じゃ」の登場

4.3.1. 左様じゃ（では）の登場

「では」とそこから派生した「じゃ」（以下「じゃ」系）は、どちらも江戸期に発生し、別れの言葉に使われるようになったと見られる。前田(1979)『江戸語の辞典』の初出紹介では、享和2年(1802年)「さよじゃ」の形である。登場の時期は「さようなら」系から少し遅れる。上方での記載がないことから、江戸かその周辺から出てきたものであろう。

さようなら系との使い分けは、さようなら系に社会的身分の上位者や改まった場での使用が目立つことから、そのような場ではないところでの使用と考えられる。すなわち、現在別れの言葉の代表を成す「さようなら」系と「じゃ」系は、同じ時代、同じ地で使われ広がったと見られる。

4.3.2. 「それでは（じゃ）」への変化（明治期）

明治期以降、文学作品からは別れの言葉として「左様では」「左様じゃ」（ひらがな表記も含む）は、インターネット資料「青空文庫」からは見いだせなかった。

明治期以降は、「それでは」「それじゃ（あ）」という現在と同じ形が使われるようになった。しかし、明治期ではまだ、かつての「さようなら」と同じ意味で、別れを表すマーカールには成りきっていない。前言（または場の状況）から、次の展開へ導く接続表現として使われている。それは、文学作品で「それでは（じゃあ）。」のみで別れを告げる場面が見いだせないこと（別れの場面で使われることさえ数少ない）、「じゃあね」等終助詞との接続がまだ現れないことからいえる。

4.3.3. 別れの言葉としての「それでは（じゃ）」の登場（大正期）

大正期、別れの場面で多くの「それでは」が使われるようになる。さらに、「じゃあ」単独で別れの言葉とする例が現れる。

例3 雪渡り

「それでは、さようなら」

(宮沢賢治, 1921)

例4 氷蔵の二階

彼女は、頭で、じゃあ、と会釈し、外に出た。

(宮本百合子, 1926)

4.3.4.感動詞「じゃ(あ)ね」の誕生

これまでの「では(じゃ)」は、あくまでも接続表現として、その文脈の中で別れの言葉の機能を果たしていた。しかし、かつて「さようなら」が接続表現から感動詞への変化したように、これらも新たな感動詞と変化していく。

昭和に入ると、少数ではあるが「じゃ」に終助詞の「ね」を付け「じゃ、ね」という別れのあいさつが出てくる。

例5 富士

「もういいわ。じゃ、ね」(女が恋人らしき男に別れを告げる)

(岡本かの子, 1910年代前半)

これらは現在では、最もよく使われる別れのあいさつ言葉になっている。これは、1960年代の終わりから「よく使う新しい別れの表現」と認識されていたことが、1969年の雑誌からもわかる。

例6 週刊朝日. 昭和44年6月20日号. ミニ字評

じゃあね

当節の子供たちは「サヨナラ」の代わりに「じゃあね」というようだ。

(奥山, 1969.: 70)

1950年以降の調査は、電子資料がまだ十分ではないため、検索使用ができず、芥川賞受賞作品全集と、星新一全集、大学や地域図書館で、この時代に該当する作品集を一つ一つ見ていく方法を取らざるを得なかった。その調査に結果、「じゃあね」は小説の中でも、1970年前後から使用が増えている。

例7 内灘夫人

「じゃあね」(19歳の少女が店の老人と年上の女性に別れを告げる)

(五木寛之, 1968年: 291)

例8 会社の女

「じゃネ」(22歳のOLが同じ会社の年上の男に別れを告げる)

(清水一行, 1971)

では、なぜ「じゃ(あ) ね」が、感動詞化しているといえるのか。それは、このひと固まりの語の前に、区切りを表す語が付けられるからである。

現在では、「じゃーね」の前にさらに、「そんじゃ」「それじゃあ」等を付けることがはやっている。

例9 その日のブログの最後の言葉

「そんじゃ今回はこれでじゃーねー」

ブログ Always by “shin” new Diary (sintaitatu.blog3.fc2.com)

例10 その日のブログの最後の言葉

「それじゃじゃーねー」

<http://blogs.yahoo.co.jp/kikkun55/57795335.html>

かつて19世紀の江戸期に「さようなら」が区切る機能を失い「ハイ、さようなら」のように使われていたのと同じように、「じゃね」にも区切りを表す言葉がつくようになってきた。これは、「じゃね」が区切りを表す接続表現というより、定型化したあいさつ言葉と捉えられる根拠である。

4.4. 形式と内容の変化

別れの言葉は、時を区切り、場の共有意識を持つなどの内容の共通性を持ちながらも、「さあらば」「さらば」「さようなら(ば)」「あば」「では」「じゃあね」等と様々な形を取ってきた。

他のあいさつ言葉にも、形式と内容の変化が認められる。しかし、その程度はそれぞれによって異なる。たとえば、「おはよう」は形式上の変化は小さいが、内容には変化が認められるなどである。

次に、それぞれのあいさつ言葉のどこがどのように変化したのかを詳しく見ていきたい。

5. 形式と内容の変化の要因

5.1. 変化した点は何か

変化を引き起こす要因を抽出するために、以下の手順を踏んだ。

1) 定型化した基本形を決める(場合によっては丁寧形とぞんざい系の2種になる)

基本の形が敬体と普通体の二種になるもの(表には※印を付けた)

「おはよう」「おはようございます」

「御苦労」「御苦労様」+ (です・でした)

「お疲れ」「お疲れさま」+ (です・でした)

- 2) 本論文で扱った主なあいさつ言葉にどんな変化があったのか、またはなかったのか表にする。
- 3) 表のデータを分析して、個々の変化の要因を導き出す。

挨拶の変化のポイントとして大きく二つに分け、さらにそれぞれ3つずつ、計6つの項目を挙げた。以下に表に使われた項目名について例と共に説明を加えたい。

<A 形式 (音声・表記的形) に関するもの>

- (1) 短縮化: 「こんにちは」が「こんちは」のように短くなる現象
- (2) 音の入れ替わり: 「さようなら」が「さいなら」というように他の音素に置き換わる現象。
- (3) 付け足し: 「こんにちは」が「こんにちはっす」というように、何かが付けたされる現象。

<B 内容 (機能等) に関するもの>

- (4) 使用者: 時代とともに、今まで使わなかった人がその言葉を取り入れるといった例
- (5) 意味の拡大: 労い言葉の「お疲れさま」が出会いのあいさつに用いられるような例。
- (6) ポライトネスストラテジー: ブラウン&レビンソンの分類を利用。同じあいさつ言葉がポジティブ機能が強くなったり、ネガティブ機能が強くなったり等ポライトネス機能が変換すること。

以下に各あいさつ言葉は、何が変化したかを示す表を載せる。

ポライトネスストラテジーの「P」はポジティブポライトネスを表す。「N」はネガティブポライトネスを表す。

表 2 あいさつ言葉の何が変化したか

	A1 短縮化	A2 音の入れ替え	A3 付け足し	B1 使用者	B2 意味の拡大	B3 ポライトネスストラテジー
おはよう	○	×	○	△	△	P(+N)
こんにちは	○	×	○	○	×	P→N
こんばんは	×	×	△	○	×	P→N
さようなら	○	○	△	○	×	N
ごろう	×	×	○	○	×	P
おつかれ	○	×	○	○	○	P

△は少数の使用または使用の可能性あることを表す

<補足1>

短縮化の例「おはよ」「おは」「おす」「こんにちは」「ちわ」「さよなら」「おつ」

音の入れ替わりの例 「さいなら」

付け足しの例 「おはよっす」「こんにちわっす」△「こんばんわっす」△「さよならっす」△
「ごくろうさまっす」「おつかれーす」

<補足2>

「おはよう」の使用者の変化について

家族間でさほど使用されなかった「おはよう」が、家族間の朝のあいさつになった。

<補足3>「おはよう」の意味の変化について

「おはよう」は元々、朝に限定したあいさつではなかったが、学校で指導項目に入れられてから、朝のあいさつという意識が高まったと見られる。しかし、近年、状況は限られるものの、時間に関係なく出会いに使う傾向が出ている。「語源」に帰るような現象のため、他と区別して△マークを付けた。

5.2. 表から分かること

共通点として、ここに挙げた全てに「(っ)す」を付けることができるということ。さらに、定型化から今までに使用層に変化が見られるということである。

また、「今晚は」と「御苦労」以外は、何らかの形式変化を起こしている。明らかな意味の拡大は、「お疲れ」系のみである。他は、定型化されたときのほぼ同じように、出会いや別れの意味を保っている。

ポライトネスストラテジーから見ると、「こんにちは」と「こんばんは」がポジティブストラテジー（以下 PP）からネガティブストラテジー（以下 NP）に変化している。これは、気のおけない粋なあいさつや、新しい時代を象徴するようなあいさつから、だれでも使えるあいさつとなり、無標化してしまったことから、PPストラテジーが機能しなくなってしまったと考えられる。

ただし、「おす」「ちわ」「おつ」等と短縮すれば、親しさや仲間意識を増すことができる。また、「(っ)す」を付けた形にすると、敬意や親しさ等を表すことができる。

現在、基本の形のままで PP が機能しないものとして、「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」がある。他のあいさつ言葉が機能して、なぜこれらは機能しないのであろうか。

それは、メッセージを伝える力の弱さに起因していると考えられる。

例えば、「おはよう」には時間に遅れず勤勉に活動することをほめる意味が、言葉に現れている。「御苦労」は、苦労したことを理解し、その頑張りを評価したり同情する気持ちが字面から見える。「お疲れ」も、疲れるまで頑張ったことへの共感が見える。しかし、「こんにちは」からは、出会ったことを認める意味しか伝わってこない。かつては、遊里出自のかっこよさや、欧米の匂

いがする先進性があったが、それがすっかり忘れられた今は、伝えるべきメッセージを失っている。

5.3. 形式変化の要因

では、変化を起こす要因とは何か。形式上の変化は、A2（音素の置き換え）よりも A1（短縮化）と A3（付け足し）によるものが多かった。そこで、この二つの変化から考えてみたい。

5.3.1. なぜ短くするのか

その理由は、二つ挙げられる。一つは、必要以上に労力を割きたくないからである。もう一つは、短くすることでコミュニケーション上の効果が得られるからである。

1) 言語の経済性

Zipf(1949)（以下ジフと表記）は、人間の行動には”principle of effort”すなわち最小限の労力で行動しようとする原則が働いているとしている。ジフは、この法則を言語学にも当てはめ、語彙の使用頻度、形式（音韻）、表記を例にした。

ジフの言う最小限の労力をあいさつ言葉の選択においてみる。「こんにちは」は「こんちは」となったところで、意味を間違える人はいない。それがさらに「ちわ」となっても、相手への心証を損なわない限り、問題はないわけである。

では、なぜ「こんばんは」は短縮化しないのか。現在は仮説しか出せる状態ではないが、一つには、使用頻度との関係が考えられる。よく使うからこそ短縮する。しかし「こんばんは」は、個々の人間がたびたび同じ相手に口にするあいさつではないのかもしれない。また、音韻論的な理由も考えられる。消すべき音素が見つげにくいのではないだろうか。

2) ポライトネスとしての効果

あいさつ言葉を短くすることで、ポライトネスの機能はどう変わるのであろうか。短縮化によって大きく形を変えた語源の異なる三つの語、「オス」「チワ」「オツ」を比較したい。これらの共通点は、親しい間柄か何かの集団内でのあいさつである。すなわち、基本の形から離れても、気持ちは通じることを確信していなければ使えない。したがって、短縮することで、PP が機能するようになる。

以上のことから、短縮(A3)の理由は、最小限の労力でコミュニケーションしようという人間本来持っている行動本能とポライトネス上の効果への期待によって、起こると見られる。

5.3.1. なぜ付け足すのか

わざわざ完成されたあいさつ言葉になぜ語を付け足すのか。この語末の語の多くは「(っ)す」である。その他は、相手への敬意を込めた労いである「御苦労」に江戸期後半に「様」を付ける

用例が増えてきた。いずれにしても、これらには以下に挙げるポライトネス上の理由が考えられる。

i) 敬意低減の法則

すでに完成されていた「御苦勞」に「様」がついたのは、第六章で述べたとおり、敬意低減の法則が働いたものである。使われているうち、「御」だけでは敬意が物足りなくなってしまう。これはいわば特別の待遇を表したかったのに、その敬語がありきたりになってしまい「無標」に近いレベルになってしまうということである。そのために、新たな敬意の指標を加える必要があった。これが「様」であったと見られる。

ii) 新敬語の利用

敬意表現の付いた「おはようございます」「ご苦勞様（です・でした）」「お疲れさま（です・でした）」を除くと、「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」には、適当な敬意を表す付属語が今までなかった。しかし、普通体の語尾に「(っ)す」を付けるいわゆる新敬語が流行り、それがあいさつにも付くようになった。この中で特に「こんにちは」はよく使われ、それに伴って、「こんにちはっす」「ちわっす」とさらなる形式変化も起こしている。

ただし、他の「こんばんは」「さようなら」は、あまり新敬語と共に使われない。敬意を表したい場合は、他の言葉を使う、この語を単独では使わず、他の言葉に敬意を含ませるといったストラテジーを使っている。

新敬語を使うことで、敬意だけではなく親しさ、または所属意識を高めることができる。したがって、「おはようございます」と「おはよーっす」は、敬意表現でも機能は異なる。

iii) 経済性（労力の削減）

元々敬体を持つ「おはよう」「お疲れ」には、「おはよーっす」「お疲れーっす」のように新敬語もよく使われる。では、敬意を表す形を持ちながら、あえて新敬語を使うのであろうか。理由は二つ考えられる。一つは、先に述べたとおり、親しさや所属（仲間）意識を表すためである。もう一つは、ジップの「最小限の労力」意識が働いている。「おはようございます」より「おはよーす」で済めばその方が簡単でいい。最近、筆者にこのような簡便あいさつを使う大学生が増えた。因みに授業終了時には、「あざっす」または「おつかれーす」が、ありがとうやさようならに混じっている。

普通体に新敬語を付けることによって、敬意表現の省エネを図っていると見られる。

iv) 使用者の変化（ロジャーズの S 字曲線）

表では、全ての項目に使用者層の変化が挙げられていた。それは、第三章のロジャーズの普及における S 字曲線から説明できる。最初は、取り入れた人数は少数であり、微増状態が続く。その後、急速に伸び、やがて安定期に入る。これはまさに、新しい言葉の普及にも言える。

v) ポライトネスストラテジー(B3)の変化

「こんにちは」「こんばんは」のポライトネスストラテジーが、PP から NP に変化している。こ

れは、先に述べたように、ありふれたあいさつになってしまったため、仲間意識を表せなくなってしまったことに原因がある。

では、「おはよう」「お疲れ」は、ありふれていながらどうして PP を保っているのでしょうか。それは、その形が残す相手を高く評価するメッセージ性であろう。「早い」「疲れた」という語源の意味を表す部分がはっきり相手に伝わるのが、これらの PP を保っている理由である。

6. 内容変化の要因

内容の変化には、使用者の変化があげられる。例えば、江戸時代庶民、それも大人の間で使われていた「こんにちは」が大正時代、小学読本に乗るまでになった。また、労いの言葉であった「おはよう」が家族間でも使われるようになった。これらは、教育事情や、外国語の訳語としての必要性が関係する可能性がある。

また、意味の拡大があげられる。「お疲れさま」は、年に広まりだした戦後間もなくのころは、労いの言葉か別れのあいさつ（それも芸能・放送業界などの）であった。しかし、1980年代以降急速にその意味を広げ、「こんにちは」の代わりの出会いのあいさつなどになっている。これは、「お疲れさま」の持つ仲間意識等が他の語にはない便利さを生み、時代の中で受け入れられていったものとみられる。

このように、内容の変化には、社会的要因が関わっている可能性が高い。次に、社会と言語変化とのかかわりを見ていきたい。

7. 「大儀」の終焉と「ご苦労の全盛」

江戸時代、武士階級は下位者を労う時「大儀」を使っていた。しかし、この語は明治期に入ると、早々に消えてしまった。その理由は、武士階級の象徴的な言葉と見なされたためと思われる。徴兵制による近代的国軍という新しい時代の重要事項は、武士の否定からはいらなければならなかった。とりわけ、この軍制度を推し進めていったのが、非武士階級の大村益次郎とその後を継いだ元奇兵隊指揮官山縣有朋であった。「大儀」はまさに追放された言葉といってもよい。

軍隊の他、公の場所で採用された労い言葉は「御苦労」である。この語が軍隊用語として正式採用された記録は見つかっていない。しかし、日露戦争回顧録である相馬基編(1935)において、皇族将校が部下に「ご苦労であった」と声をかけ、その部下が感激したという記述がある。日露戦争時には、この語が部下を労うものとして使われていたのは間違いない。

「御苦労」は、「ご苦労様」の形で、上位者にも親しいものにも、見知らぬ者にも、すなわち、だれにでも使えた。明治から昭和 50 年頃まで、「御苦労」系の全盛期といってよいだろう。この時代を振り返るならば、実際生活の苦労が絶えなかった時代であった。相次ぐ戦争と敗戦、復興と高度成長の中で、日本人は苦労をし続けた。そんなお互いの苦労を讃え、同情し合っていた時

代であった。

7.2. 「お疲れ」の伸張

「お疲れさま」等の「お疲れ」系は、古くからあったようだが、主に名詞での使用で、感動詞としては、上方・江戸等ではほとんど会話で見いだせない。中部地方等の方言として使われていた。芸能界（特に歌舞伎界）、放送業界にあいさつとして使われていた。

別れのあいさつとして広がるのは、映画や放送業界が盛んになってからのことであるから、昭和に入ってからではないか。労いとしては、昭和の終わりまで「ご苦労様」とうまく使い分けられていた。この語は、1980年代、御苦労以上に便利な労いとして認識されるようになり、1990年代には、非常な広がりを見せ、意味の拡大を見ている。

7.3. 「じゃあね」と若者文化

「じゃあね」は、昭和の初期からあったとしても、新たな別れの感動詞といえるほど、定型化されるのは、1960年代後半（昭和40年代）である。この時代、戦後に教育を受けた子供たちが成長し、朝鮮戦争、中華人民共和国の成立、日米安保、それに続く学生運動など、古い価値観が保てない時代であった。この時代の中、若者たちは既成の縛りを次々に破り、新しい言葉を模索していた。

「じゃあね」が若者の別れのあいさつとして、人気を博したのも、そのような背景が影響しているのではないだろうか。

7.4. あいさつ言葉が消える（新興類似表現の登場）

あいさつにおいて、言葉を交わす傾向は増え続けている。かつて、無言の会釈が普通であった職場の廊下でのすれ違いも、今では「声をかけないのは失礼」という意識に変わってしまった。そのような時代にありながら、「ご苦労様」が絶滅の危機にひんしている。他にも「ごきげんよう」も絶滅危惧種に入れられるかもしれない。絶滅とはいかないまでも「さようなら」は、学校以外では使う機会があまりない。

これらの衰退の原因として考えられるのが、類似表現の勢力拡大である。かつて「大儀」は政策が絡んでいたとはいえ「御苦労」に追われた。その「御苦労」も「お疲れ」系によって、特に若い層の使用者を減らしている。「こんにちは」も「おはようございます」の午後進出と、「お疲れさま」の汎用化、さらに、自らの派生語である「ちやす」等によって、使用の機会を減らしている。「さようなら」は、公の場使える「失礼します」と日常的で家族にも使える「じゃあね」によって、肩身の狭い立場にいる。今後、「さようなら」は「さらば」と同じように感動詞から名詞

さらに連体詞的用法に変わっていく可能性も考えられる。

社会に何らかの変化があれば、それに合わせて選ばれる言葉も変わってくる。わずか10年後、あいさつ言葉に変化が起きているかもしれない。

7.5. あいさつ言葉を変化させる要因とは

これまでの形と内容の変化の分析結果から、変化をもたらすものは内的要因と外的要因に分けられる。

内的要因

- 1) 最小の労力で行動しようとする意識（言語の経済性）
- 2) ポライトネス（Pと略）上の効果を求める意識（主にポジティブP）
- 3) 敬意低減の法則
（主にネガティブPである。無標化を恐れ、敬意を示す付属語を付け足す）

外的要因

- 4) 使用層の変化（普及のS字曲線）とそれに伴う無標化（ポライトネス機能の変化）
- 5) 社会からの影響
- 6) 類似語表現の勢力拡大
- 7) 誤解の定着

これらの要因をさらにみると、人間関係上の効果を求めて語を変形させる1)から3)までと、時代の変化の影響を受けて語が変わっていく5)から7)までに二分される。4)は普及といういわば社会的な要因でもあるため、はっきりと分けられるものではない。したがって両者の中間に位置している。前者の変化は個々人の内側から発するものであり。後者は外部からの影響によるところが大きい。また、これらの要因は互いに関係しあっている。たとえば、敬意低減の法則は、敬意が無標化されることでもある。また、言語の経済化は、言葉を短くして元の形を崩しても許される関係であることが前提となることが多いため、ポジティブPの効果にもつながる。

以上、さまざまな要因を挙げたが、これらが複雑に影響しあい、言語変化につながると考えられる。

8. あいさつ言葉の終焉

8.1. 意味と機能の希薄化から無標化へ

最も古い可能性が高い定型化あいさつである「さらば」をモデルに、あいさつ言葉の終焉を見てみたい。

「さらば」は、時間を区切る機能のゆえに、別れのあいさつに使われるようになった。しかし、

定型化によってその意味は薄れ、単なる別れを告げる音の連なりとなっていった。しだいに、ありふれたあいさつとなり、そのままの形（基本形）は、無標化していく。この無標化とほぼ同時に「さらばへ」「あば」等の派生語が生まれるようになる。そして、実際に時間を区切る機能を持った新表現「さようなら」に代わられる。

8.2. 現役を退いた後のあいさつ語（用途と品詞の変化）

8.2.1. 感動詞から名詞へ

使い古されたあいさつ言葉は、もはや感動を呼ばない感動詞になり、他の類似表現が力を得れば、実用的なあいさつ言葉の座を降りなければならなくなる。しかし、一度定型化されたものは簡単には消えない。そこには二つの道が残される。

一つは、文学的な表現になり、人の心情に訴える働きをする。我々は文を書く時、敢えて古語を使うことがある。その時この古語は、現代の表現に対して有標であるがゆえに、心情を強調する効果がある。たとえば、平安時代から江戸期まで使われた「さらば」が、日常のあいさつ言葉というステージでは現役を終えたものの、SFアニメの主題歌になるほど、その存在感は確かである（1974年からテレビで放送が始まったアニメ「宇宙戦艦ヤマト」の主題歌の冒頭が「さらば地球よ」）。

もう一つは、品詞を変えて生き残ることである。平安時代の「さあらば」が「さらば」という定型化された感動詞になった。それが、あいさつ言葉の座を「さようなら」に譲ってから、「おさらば」のように、主に名詞として使われるようになった。また現在、別れのあいさつを代表するはずの「さようなら」も、「サヨナラする」「さよならだけが人生だ」のように名詞として使われることが珍しくない。また、サヨナラヒット、さよならパーティーのように名詞を修飾する連体詞のように使われるようになっている。

8.2.2. 元が名詞の語（大儀）

では、定型化する前の状態が名詞の場合はどうなるか。「大儀」がこの例に当たる。武家社会で主君が家来や使用人をねぎらう「大儀」は明治維新後、武家社会の消滅と共に消させてしまった。しかし、江戸以前から全国的に広がっていたこの語には敬意を示す「御大儀」という使い方もあった。これは、消されることはなく、方言として今でも残っている。ただ、感動詞としての使い方はさほど多くはないのではないか。「御大儀ぶるまい」のように名詞の一部ないし、名詞を修飾する連体詞の働きをしてるものが多いようである。

他に名詞から来ているものには「御苦労」「お疲れ」があるが、大儀と異なり、あいさつ以外にも普通に使える言葉なので、感動詞として忘れられていっても、元の名詞としての機能は失われまいであろう。

9. まとめ

あいさつ言葉の変化は、形式と内容の二つの面からとらえられる。そして、その変化の要因は、内部からの要因と外部からの要因に分けられる。

最初に定型化されたと言われるあいさつ言葉が別れの言葉であったということは、日本人がそれだけ、別れ方に心を砕いていたということであろう。「去る」という行為の前には、言葉でそれを表し、人間関係の維持につなげなければならない。相手が「ああ、別れを告げているのだな」とわかるような別れのマーカーが必要とされたのであろう。

その際、別れのマーカーに選ばれたのは、場の空気から時間の区切りを行うという行為であった。これは一方的な宣言ではなく、相手との阿吽の呼吸で行われた。これは、「場の共有意識」によるものである。

この場の共有意識は、別れのときだけではなく、後年生まれ続けた様々なあいさつにも当てはまる。この背景には、日本人の思想や文化が関係している。

あいさつ言葉は感動詞の一つである。その品詞名の通り、人の心情と大きく関わっている。そのため、あいさつ言葉は時間と共に様々な変化を起こす。人は、古いものを忘れ、新しさを求める。個々の言葉の持っている本来の意味を離れ、飽き、時代によりあった語を歓迎する。

すでに、「さらば」や「大儀」はあいさつ言葉としては終焉を迎えたと考えていいだろう。また、「ご苦労様」や「さようなら」もかなり人気に陰りが見えている。しかし、かつて広く使われていたあいさつ言葉は、そう簡単には消滅せず、品詞を変え、名詞や連体詞になることで残っていく。

あいさつ言葉に変化は付きものではあるが、完全にその存在を消すことは難しい。使われなくなったとしても、その時代の特徴や人々の生活、心情を知る「よすが」として、貴重な存在であり続けるであろう。

尚、本稿は論証不十分の箇所もある。限られた紙面では十分に表せなかったが、近年の拙稿を合わせ読んでいただければ、例や根拠となるデータをお見せできる。

謝辞

6年間、私という不肖の教え子をご指導くださった井上先生に心からの感謝をいたします。まだ、半人前ですが、これからも研究を辞めずに進んでいきたいと思っております。どうか今後ともよろしく願いいたします。

参考文献

A

阿部圭子(1999). 「日米のあいさつことばの輪郭」. 『國文學』. 第44巻6号. 學燈社

挨拶教育研究会(2004). 『あいさつの教科書』. 中経出版

秋月高太郎(2007). 「デジタル表現論」. 『デジタル社会の日本語作法』. 岩波新書 pp90-123

B

Broun, Penelope and Levinson, Stephen (1987). *Politeness :some universals in language usage*. Cambridge University Press

文化庁(2006) 平成17年度「国語に関する世論調査」の結果について 文化庁ホームページ
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h17/kekka.html. (2008年検索)

C

Coulmas, Florian (1992). *Die Wirtschaft Mit Der Sprache*. 諏訪功・菊池雅子・大谷弘道訳(1993). ことばの経済学. 大修館書店

D

大東京火災編(1989). 『今春卒業の短大生に聞く大学生活の総決算』. 大東京火災. pp16-22

E

江端義夫(1997). 「挨拶言葉の分布と歴史」. 『國文學.42(7)』. 學燈社. pp62-65

F

藤原与一(1992). 『あいさつことばの世界』. 武蔵野書院

古田東朔(1984). 『小學讀本便覧 (復刻版)』. 武蔵野書院

H

萩野貞樹(2005). 『ほんとうの敬語』. PHP研究所. pp137-140

浜利子(1982). 『さわやかマナーブック』. 産業能率短大出版部. p174

長谷川町子(1951). 『サザエさん. 長谷川町子全集4』. 朝日新聞社(1997). p47

長谷川町子(1971). サザエさん. 長谷川町子全集22. 朝日新聞社(1998). p85

長谷川町子(1997~98). 『長谷川町子全集サザエさん1~21』. 朝日新聞社

林曾登吉(1893). 『新選和英辞書』. 東京. 細川芳之助

Hepburn, J,C(1872). 『英和語林集成 (再版)』. 日本横浜梓行

Hepburn, J,C(1873). *Japanese-English English- Japanese Dictionary*

東野圭吾(1998). 『あの頃僕らはアホでした』 集英社文庫

比嘉正範(1981). 「あいさつの言語学」. 『言語4月号.vol.10. 特集あいさつの言語学』. 大修館. pp4-9

比嘉正範(1985). 「あいさつとあいさつ言葉」. 『日本語学8月号』. 明治書院. pp15-22

平田宗史(1991). 『教科書でつづる近代日本教育制度史』. 北大路書房

堀内みね子・足高智恵子(1989). 『日本でビジネス』. 専門教育出版

星新一(1961-68). 『星新一ショートショート 1001』. 新潮社(1998).

I

井出里咲子(2003). 「あいさつ」. 『応用言語学辞典』. 研究社. P235

井出里咲子・任栄哲 (2004). 『箸とチョッカラク』. 大修館書店

井出祥子(2006). 『わきまへの語用論』. 大修館

飯間浩明(2003). 『遊ぶ日本語 不思議な日本語』. 岩波書店.pp73-78

今村桂一郎(1971). 『新ビジネスマンの礼法』. 日本文芸社,

井上史雄(1999). 『敬語はこわくない』. 講談社

井上史雄(2008). 『社会方言学論考』, 明治書院

石垣幸雄(1981). 「あいさつの生態学」. 『言語 4 月号. Vol.10. 特集あいさつの言語学』. 大修館.pp20-26

石井米雄・千野栄一(2004). 『世界のことば・出会いの表現辞典』. 三省堂.

五木寛之(1972). 『内灘夫人』. 新潮文庫

J

Jakobson, Roman (1963)ESSAI DE LINGUISTIQUE GE'NE'RALE X I

” Closing statementLinguistics and Poetics” ,T.A.Sebeok(ed),style in Language(1960)の翻訳版

ローマン・ヤーコブソン(1973)『一般言語学』第四部詩学. 川本茂雄監修 田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子訳 みすず書房. pp183-224

十返舎一九(1802). 東海道中膝栗毛 (初編). 麻生磯次校註(1973). 東海道中膝栗毛 (上). 岩波書店

K

蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998). 『敬語表現』. 大修館書店, p214

陰山慶一(1990). 『海軍飛行科予備学生学徒出陣よもやま物語』. 光人社 pp30-31

甲斐睦朗(1985). 「日本語あいさつ言葉の順序性」. 『日本語学 1985 年 8 月号』. 明治書院. Pp23-30

川口良・角田史幸(2005). 『日本語は誰のものか』. 吉川弘文館

Kelly & Walsh, Limited(1908)Kelly&Walsh's Hand-Book, Kelly & Walsh, Limited

見坊豪紀(1979). 『ことばのくずかご』. 筑摩書房

金田一秀穂(2003). 『新しい日本語の予習法』. 角川書店

小林千草(1998). 『ことばの歴史学』. 丸善ライブラリー280. 丸善

小林亥一編(1998) 『文久三年御蔵島英語単語帳』 小学館

小林作都子(2008). 『不愉快な敬語』. PHP 研究所. pp116-123

国立国語研究所編(1985). 『国定読本用語総覧 I』. 三省堂

国立国語研究所編(1987). 『国定読本用語総覧 II』. 三省堂

国立国語研究所(1987). 『国定読本用語総覧 III』. 三省堂.

児玉徳美(2006). 『ヒト・ことば・社会』. 開拓社

児美川孝一郎(2012). 「「親密圏」より外にアンテナを」. 朝日新聞 2012 年 6 月 6 日朝刊

オピニオン欄

- 倉持益子(2008.2). 「「お疲れさま」系あいさつの意味の希薄化と拡大」. 『明海日本語 13』. 明海大学日本語学会. pp65-74
- 倉持益子(2008.3). 「若い世代における「お疲れ」系あいさつの使い方」. 『明海対照言語学論集.No8.』明海大学大学院. 応用言語学研究科. 水谷研究室. pp25-32
- 倉持益子(2008.6). 「「お疲れ」系あいさつの使用場面の拡大」. 『言語と交流第 11 号』. 言語と交流研究会. 凡人社. pp37-49
- 倉持益子(2010). 「出会いのあいさつ言葉におけるコードと機能の変化—「こんにちは」を例に—」. 『言語と交流第 13 号』. 言語と交流研究会編. pp28-37
- 倉持益子(2010). 「社交言語の生成とコード・機能の変化—ファティク化という概念—」. 『明海日本語 15』. 明海大学日本語学会編. pp77-78
- 倉持益子(2011). 「「御苦労」系労い言葉の変遷」. 『明海日本語第 16 号』. 明海大学日本語学会. p13-21
- 倉持益子(2013). 『あいさつ言葉の生成と変容』(博士論文). 明海大学大学院応用言語学研究科
- 草柳大蔵(2001). 『きれいな敬語 羞かしい敬語』. グラフ社. p66
- L
- Ladd, George,T(1910)Rare days in Japan, Longmans,Green,and CO
- M
- 前田勇(1964). 『近世上方語辞典』. 東京堂, P441
- 前田富祺(1985). 「あいさつ言葉の歴史」. 『日本語学 8 月号』. 明治書院. pp79-89
- 前田富祺監修(2005). 『日本語源大辞典』. 小学館. p571
- Malinowski,B(1923). “The problem of meaning in primitive languages”. inC.K. Ogden and I.A.Richards.(eds.)*The meaning.Routledge.*
- 馬瀬良雄(2003). 『信州のことば 21 世紀の文化遺産』. 信濃毎日新聞社
- 松浦玲(1979). 『明治維新論』. 現代評論社 . pp143-151
- 水上瀧太郎(1926). 『山を想ふ』. 現代日本紀行文学全集東日本編(1976). ほるぷ出版
- 皆川澄夫(1988). 『マンガ ビジネスマナー』. サンマーク出版 . p175
- 南蛙坊 (1773). 「今歳咄」. 武藤禎夫校註 (1962). 『安永期小咄本集近世笑話集注』. 岩波文庫
- 三田昭夫(1988). 『マンガ版敬語・言葉づかいに強くなる本』. 明日香出版, p238・p248
- 三井はるみ(2006). 「おはようございます, こんばんは」. 『月刊言語. Vol.35・No12. 通巻 425 号』. 明治書院. pp80-83
- 宮地朝子・北村雅則・加藤淳・石川美紀子・加藤良徳・東弘子(2007). 「共在性からみた「です・ます」の諸機能」. 『自然言語処理』. Vol.14. No3. pp17-38
- 宮地伝次郎(1968). 「どうぶつのあいさつ」. 『言語生活.1968 年 1 月号. No196』. 筑摩書房. pp46-51

三宅和子(2004)「『規範からの逸脱』志向の系譜—携帯メールの表記をめぐって—」

『文学論藻』第78号(東洋大学文学部紀要第57集 日本文学文化編)

宮沢賢治(1918)。「双子の星」.『新編 銀河鉄道の夜』(1989) 新潮文庫、新潮社

宮沢賢治(1924)。「かしはばやしの夜」.『宮沢賢治全集8』.ちくま文庫.1986.ちくま書房

水野雅央(1992).『標準語の現在』.葦書房

水谷公弥(1976).『敬語に強くなる本』.エール出版. pp144-145

水谷修・水谷信子(1988).『外国人の疑問に答える日本語ノート1』.The Japan Times.

Pp10-11

向田邦子(1974)。「だいこんの花」.『新潮文庫だいこんの花(前)』(1991).p183

村上壽子(1933)。「ザウサンサルサン」.初出:「幼年倶楽部」講談社. 青空文庫 <http://www.aozora.jp>

武藤禎夫校註(1987).『安永期小咄本集』.岩波書店

森鷗外(1901)。「即興詩人」アンデルセン作品の翻訳, 青空文庫 <http://www.aozora.jp>

森下紀良(1980).『北満初年兵の生活日記』.三恵企画

森山卓郎(1999)。「お礼とお詫び—関係修復のシステムとして」.『あいさつことばとコミュニケーション』. 國文學 1999年5月号第44巻6号』 學燈社. pp78-82

諸星美智直(1999)。「近世武家・町人のあいさつことば」.『國文學. 第44巻6号』. 學燈社

文部省(1904)。「尋常小學讀本二」.『小學讀本便覧第六巻』. 古田東朔(1983). 武蔵野書院

文部省(1906).『尋常小學讀本八』. 博文館

文部省(1911).『小学校作法教授要項』. 宝文館

文部科学省(2012)。「道德」. 小学校学習指導要領 第三章. <http://www.mext.go.jp>

N

中村一八 「中村一八の知心コラム」 <http://www.newair.co.jp/column/specialcolumn>

永崎一則(1971).『ことばづかいと話し方』. 文和書院,

夏目漱石(1908)。「三四郎」. 青空文庫 <http://www.aozora.jp>

西村定雅(1785).『当世真々乃川』.古谷知新編(1918).『滑稽文学全集第十二巻』. 文藝書院 . pp173-175

野口雨情(1921)。「仲の悪い姉妹」.『小学女生』.『野口雨情第六巻』(1986). 未来社

野元菊雄(1968)。「年賀状とクリスマスカード」.『言語生活.1968年1月号.No196』. 筑摩書房. pp39-45

野元菊雄(1985)。「あいさつ言葉の原理」.『日本語学8月号』. 明治書院. pp4-14

野村久太郎編(1919).『役者の素顔』. 玄文堂

野崎六助(2010).『捕物帖の百年—歴史の光と影』 溪流社

O

沖久雄(1985)。「あいさつ言語行動分析の観点」.『日本語学8月号』. 明治書院. pp31-42

奥秋義信(2007).『勘違い敬語の事典』. 東京堂出版. p140

奥津敬一郎・沼田善子(1985)。「日・朝・中・英のあいさつ言葉」.『日本語学8月号』. 明治書院. pp53-69

- 奥山益朗(1969). 『日本語は乱れているか』. 東京堂出版. pp18-19
 奥山益朗(1973). 『敬語用法辞典』. 東京堂出版.p123
 奥山益朗(1980). 『話し言葉の誤典』. 自由国民社
 奥山益朗(2001). 『あいさつ語辞典』. 東京堂出版
 大堀壽夫(2004). 「文法化の広がりと問題点」. 『月刊言語. Vol.33・No4. 通巻 393 号』. 明治書院
 大島建彦(1981). 「あいさつの民俗学」. 『言語 4 月号. Vol.10. 特集あいさつの言語学』. 大修館.pp27-33
 大野晋(1974). 『岩波古語辞典』. 机上版(1982). 岩波書店
 織田作之助(1942). 「秋深き」. 『織田作之助全集』. 文泉堂出版(1976).

R

- Everett M. Rogers(1971). *Communication of Innovation*. 宇野善康監訳(1981). 『イノベーション普及学入門』. 産能大学出版部

S

- 西条貞(1968). 「オーキニからオシズカニまで」. 『言語生活.1968 年 1 月号. No196』. 筑摩書房. pp31-38
 斉藤喜門(1968). 「あいさつの指導」. 『言語生活.1968 年 1 月号. No196』. 筑摩書房. pp52-57
 斉藤喜門(1981). 「学校におけるあいさつの指導」. 『あいさつと言葉. 「ことば」シリーズ 14』. 文化庁. pp84-94
 桜井華子(1971). 「新入社員のことばづかい」. 明治書院. p22・p94
 真田信治(1981). 「あいさつ言葉の地域差」. 『あいさつと言葉. 「ことば」シリーズ 14』. 文化庁.pp73-83
 真田信治(1985). 「あいさつ言葉と方言—地域差と場面差—」. 『日本語学 8 月号. 明治書院』. pp43-52

Edward Sapir(1921). *LANGUAGE An Introduction to the Study of Speech*. Dover
 Publication,inc

- サトウサンペイ(1974). 『フジ三太郎 1』. 朝日ソノラマ
 サトウサンペイ(1974). 『フジ三太郎 2』. 朝日ソノラマ
 サトウサンペイ(1974). 『フジ三太郎 3』. 朝日ソノラマ
 サトウサンペイ(1975). 『フジ三太郎 4』. 朝日ソノラマ
 サトウサンペイ(1975). 『フジ三太郎 5』. 朝日ソノラマ
 沢木幹栄・杉戸清樹(1999). 「世界のあいさつ言葉の対照研究に向けて—あいさつ言葉への視点」. 『國文學』. 1999 年 5 月号 第 44 卷 6 号. 學燈社
 柴田武(1976). 「標準語と方言. 柴田武編」. 『朝日小事典現代日本語, 第二部』. 朝日新聞社
 柴田武(1978). 『社会言語学の課題』. 三省堂. p67
 式亭三馬 (1813) 『浮世床』. 初編卷之上, 中西善三校註(1955), 日本古典全書, 朝日新聞社, p105
 式亭三馬 (1813) 『浮世床』. 中村通夫校註(1957). 日本古典文学大系 63. 岩波文庫
 島崎藤村(1906). 『破戒』. 現代文学大系 13. 筑摩書房(1968)

- 島崎藤村(1912).『千曲川のスケッチ』.新潮社文庫(1955)
- 主婦と生活社編(2002).『ビジネスすぐに使える便利事典』.主婦と生活社. p 305
- 杉本つとむ(1989).『西洋人の日本語発見』.創拓社. p258
- 杉戸清樹(1981).「あいさつ言葉と身振り」.『あいさつと言葉.「ことば」シリーズ 14』.文化庁. pp47-59
- 鈴木孝夫(1968).「あいさつ論」.『言語生活.1968年1月号.No196』.筑摩書房. pp19-30
- 鈴木敏夫(1980).『江戸の本屋(下)』中公新書 571.中央公論社
- 牲川波都季(2002).「挨拶表現」.『日本語表現・文型辞典』.朝倉書店. P1
- 相馬基編(1935).『日露戦争を語る 陸軍編』.東京日日新聞社 .pp187-188

T

- The City Council of Kyoto(1895)The Official Guide-Book, MEISHINSHA
- 田島信元(1999).「あいさつの心理学—あいさつ行動の機能と発達」.『國文學.第44巻6号』.學燈社
- 竹田茂生・藤木清(2006).『知のワークブック』.くろしお出版. p128
- 田中章夫(1991).『標準語 ことばの小径』.誠文堂新光社
- 田中義廉・諸葛信澄(1873).『師範学校小學教授法』.雄風舎
- 津田仙吉(1879).『英華和譯字典』.東京府.山内輓
- 鶴屋南北(1825).『東海道四谷怪談』.郡司正勝校註(1981).新潮日本古典集成.新潮社.p63
- 都染直也(1992).甲南大学キャンパスことば辞典(PDF版).
<http://ha8.seikyoeu.ne.jp/home/wexford/kucda.pdf> (2007年12月検索)
- 都染直也(1999).「キャンパスのあいさつことば」.『國文學.第44巻6号』.學燈社
- 東京都立労働研究所編(2000).大都市若年アルバイトの就労と意識
- 東京書籍社史編集委員会編(1980).『近代教科書の変遷 東京書籍七十年史』.東京書籍

U

- 氏家洋子(1999).「日本社会の出会い・別れのあいさつ行動」.『國文學.第44巻6号』.學燈社
- 宇野義方(1881).「手紙のあいさつと言葉」.『「ことば」シリーズ 14.文化庁』. pp60-72
- 宇佐美まゆみ(1999).「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」.『國文學.第44巻6号』.
 學燈社

W

- 若林虎三郎・白井毅編纂(1887).『改正教授術巻一』.普及舎
- 渡辺友左(1968).国立国語研究所報告 33「家庭における子供のコミュニケーション意識」.
- 渡辺友左(2007).「あいさつ」.『日本語学研究事典』.明治書院 pp198-199

Y

- 山口廣太(1992).『なぜマクドナルドは2000億円企業になりえたか』.経林書房. pp12-13
- 柳田國男(1946).『あいさつの言葉.毎日の言葉』.新潮社版.(1993年初版.2005年第八刷).新潮社文庫
 p98
- 山中桂一(2006)「名著再読 12 ヤーコブソン「言語学と詩学」」『月刊言語 2006 12Vol.35.No12』

大修館書店

- 矢田津世子(1936). 「神楽坂」. 『矢田津世子全集』. 小沢書店(1989).
 任栄哲・井出里咲子(2004). 『箸とチョッカラク』. 大修館書店
 横山駿也(2007). 『残しておきたいこの授業』. PHP 研究所
 読売新聞(2006)「部下に「おつかれさま」今や“常識”…文化庁調査」2006年7月27日
 吉岡泰夫(2006)「方言が若者ことばを活性化する」『月刊言語』2006 3Vol.35 NO.3 pp26-33

辞書

- 大辞林初版(1988)・二版(1995)・三版(2006)
 学研国語大辞典初版(1980)・二版(1988) 学研
 岩波国語辞典五版(1994)・六版(2000) 岩波書店
 時代別国語大辞典室町時代編二(1989). 三省堂
 広辞苑(第六版) 岩波書店(2008)
 明鏡国語辞典(2002) 初版 大修館書店
 日本国語大辞典(2001)第二版 第五巻 小学館
 三省堂国語辞典三版(1982)・四版(1992) 三省堂
 集英社国語辞典初版(1993) 集英社
 小学館国語辞典編集部(2000). 日本国語大辞典第二版第一巻. 小学館. pp21-28
 小学館国語辞典編集部(2001). 日本国語大辞典 第二版第二巻. 小学館. p1218
 小学館辞典編集部(1994). 使い方のわかる類語例解事典. 小学館. P517
 新選国語辞典七版(2000)・八版(2002) 小学館

インターネット検索資料

- 青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>
 アロマセラピー. ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org/wiki/> 2012年8月21日検索
 8時だヨ! 全員集合. Wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/> 2012年8月9日検索
 イケメン <http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2012/08/15 検索)
 空手入門. <http://budoukarate.ninja-mania.jp/index.html> 2012年8月9日検索
 神戸市立千代ヶ丘小学校(2012). 学校の HP. http://www2.kobe-c.ed.jp/cyg-es/index.php?page_id=55
 株式会社グローバルスポーツ医学研究所 HP :
<http://www.global-sports.co.jp/company/history.html> 2012年8月21日検索
 株式会社 RAJA HP www.raja.co.jp (2007). 検索 2008年12月
 国立国語研究所電子化報告書. <http://libgw.ninjal.ac.jp/>
 国立国語研究所 方言文法全国地図第6巻 http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/gaj_map/
 2012年10月1日検索

宮田輝 : <http://ja.wikipedia.org/wiki/> 2012年8月9日検索

成長のS字曲線: 八雲ブログ (2011年2月4日掲載)

<http://oyashima.way-nifty.com/blog/2011/02/s-05df.html>

宇宙戦艦ヤマト <http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2012/08/15 検索)